

アンパイア（第5話）

『おいっ この野郎！』

グラウンドに緊張がはしった。鹿島杯1回戦、デッドボールを当てられたA中の選手は、バットを投げ、マウンドに向かって歩き始めた。

『退場だ！』周りの大人からそんな声が聞こえる。中学野球では前代未聞の出来事。主審をしていた押見はその選手に駆け寄った…。

思い返せば、試合前から先生方の様子が変わった。皆、この試合の主審をやりたいくない雰囲気だった。事情を良く知らない押見が主審をすることになったが、まさかこんな事が起こることは…。想定外の出来事にどうしたらよいのか分からなかった。

『退場にするか。どうする？』私はその選手に駆け寄り、彼の目を見た。彼はピッチャーだ。そして、野球にしっかり取り組んだことがなければ投げることのできない本格的なボールを投げている。押見はとっさにある言葉が出た。

『大丈夫か。怪我はないか。』

『べっ、べつにたいしたことねえよ。』そんな言葉を言い残し、彼は一塁に向かって歩き始めた。

1か月後、県東地区総体が行われた。清真の1回戦の相手はA中だった。先生達は試合前からA中の彼の話題で持ちきりになっていた。『中学生らしくない態度があった場合、すぐ退場にしよう。』バットを投げたり、審判に暴言をはけばすぐ退場になるような雰囲気だった。

清真 対 A中の試合は、1-0 清真リードで最終回を迎えた。

2アウト一塁。ここであのピッチャーの子に打順がまわった。彼は左打者でバッターとしても強打者だった。勝負を避ける選択もあったが、ヒットもフォアボールも同じと考え、勝負した。『カキーン』彼は完璧にボールをとらえた。

打球は高々とあがり、ライトフェンス近くまで到達した。しかし、清真の外野手が下がっていたこともあり、その後の打球の処理をスムーズに行った。

『アウト！ ゲームセット。』審判のコールが高らかに響いた。ホームに突入した一塁ランナーがタッチアウトになった。ヒットを打ったA中の彼は二塁付近で試合終了のコールを聞いた。

試合後、押見は大の字で寝ているA中の彼の所にいった。そして、
『ナイスバッティング』と声をかけた。彼は起きあがって私を見た。私は
『高校野球はやらないのか？』と質問した。『やらねえよ。今日で引退だよ。』
いきがってはいるが、少し寂しそうに答えた。『お疲れ様。』私は手を差し出した。すると、彼も手を差し出し照れくさそうに握手をした。

『やはり…。』

彼の手にはたくさんのまめがあった。